時代を読む

内山 節

五輪の廃止、議論のとき

一九六四年の東京オリンピックは、私が中学生のときのことだった。といっても私は観戦にも行っていないし、テレビでみることもなかった。オリンピックを開催するために、私の家の近くで、競技会場をつなぐ一本の道の拡幅工事がおこなわれた。当時の東京の道は、幹線道路でも細い道が多かった。

問題はそのやり方である。オリンピックの成功のためという大義名分をたてて、道路沿いに住んでいる人たちに、問答無用で立ち退きを迫った。私の家の近くでは、一軒の家が立ち退きを拒否していた。と、買収の済んだ両脇に道路を造り、その家は川のなかの中州のようなかたちになってしまったのである。幹線道路だからその家の両側は、昼夜を問わず車が走っている。しかも家に入るための横断歩道もつけられなかったから、その家の人は車が途切れたときに走って家の敷地に行くしかなかった。

しばらくしてこの家の人は立ち退きに同意した。こうして一本のオリンピック道路が完成した。そんな様子をみていたから、私は前回の東京オリンピックを、冷めた目でみていた。

オリンピックには、スポーツの祭典という言葉だけでは語れない問題が存在しているのである。今年の東京オリンピックは、現政権が選挙に勝つための開催になってきた。半年余り後の北京の冬季五輪もそうであるように、それは政治のための祭典でもある。

そもそも近代オリンピックの開催を提唱した、フランスのクーベルタン男爵がスポーツに関心をもったのは、一八七〇年の普仏戦争（ドイツ・プロシアとの戦争）でフランスが敗れたことと関係している。ドイツとの体力の差が敗北を招いたと感じたクーベルタンは、体育教育を充実させ、身体能力と知性に優れたエリートの養成をめざすようになった。彼の思想はエリート主義、白人中心主義、男性中心主義であり、それらのことや、一九三六年にナチスが国威発揚のためにおこなったベルリンオリンピックを称賛したことは、後に批判を受けるようになる。

さらに二十世紀終盤になると、オリンピックには商業主義がはびこり、そこに群がる政商たちの祭典という性格がつくられるようになった。残念ながら近代スポーツには、純粋なスポーツの祭典とはいえない側面が付着しているのである。それはオリンピックだけのことではなく、たとえば十九世紀後半にイギリスでサッカーがつくられたのは、スポーツをとおして国民の統合をはかるためだった。それまで各地でさまざまなルールでおこなわれていたフットボールのルールを統一し、地域や学校別対抗戦をおこないながら、その熱狂をとおして国民の統合を果たそうとした。

近代スポーツは、現代社会の姿を投影しているのである。人々の純粋な思いや努力をも、政治や市場経済の道具にしていく。この構造のなかにあらゆるものをのみ込むことによって、人々を巻き込んだ政治支配体制の維持や、経済の拡大がめざされていく。この現代社会のかたちが、スポーツの世界にも投影している。

オリンピックは中止ではなく、その廃止を議論してもよい時期にきているのではないだろうか。政治とは何か、経済はどうあるべきかを考え直し、よりよい社会のあり方をみつけだすためにも、である。

（哲学者）

2021・6・20